

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 395 回 「メス化」する男性と、「オス化」する女性

2010.12.12

お会いしたことはないのだが、僕の嫌いな人の一人に、「蓮舫」と言う政治家(パフォーマー?)がいる。もちろん彼女にとっては、どうでもいいことである。彼女は、成功した新しい強いタイプの女性として、マスコミの注目を集めている。中国系日本人で初めて大臣に就任した蓮舫は、「女性に生まれつき備わった強さを、私は持っています」と、メディアの取材に応じて堂々と言い切った。

「草食系男子」なんて、僕に言わせれば、訳が分からん言葉が、今や世界に通じる言葉となった。今の日本では、男性は「弱者」といっても過言でない。あらゆるデータが、女性の存在価値を高くアピールしている。家族に寄生している「パラサイト」男性が増えているらしい。古来から続いてきた日本の男性中心の社会。これが崩れ始めたのは、明らかなようだ。日本社会の男性による「親父 = 夫 = 武士」という構造が、「男女平等」、いやむしろ「女性の時代」という、現代的価値観によって打ち砕かれたのだ。やがて「武士道」は新しい価値観に圧倒され、男性は伝統的な「進むべき方向」を失った。男性は女友達や女房にさえ、自分の理屈を納得させられなくなり、「優しい」「いい人」に変身した。多くの男子は受け身で、「肉食系女子」に従うばかり。恋愛の場面でも、リードするのはいつも女性、男性は軟弱で、何となくピクピクしている。そしてついに、男性は「メス化」し、女性は「オス化」した。

その「メス化」を促すのは、女性の経済力という背景も見逃せない。今年こんな調査結果が出て、驚いた。30歳未満の女性の可処分所得は月21万8,100円と、男性のそれを2,600円を上回り、初めて逆転した。(単身世帯を対象にした総務省の09年の全国消費実態調査)税金などを支払う前の名目給与を見ても、民間企業を対象とした国税庁の調査で20代後半の男女の年間の平均給与の差は大きく縮まった。厚生労働省の調べでは、大卒の初任給の男女差もこの5年間で縮小している。完全失業率もこのところ女性が男性を下回っている。

高齢化が進んだ日本社会では、基本的に労働力が不足しているから、多くの女性が家庭を出て仕事をするようになった。当然、社会の中で果たす役割も、以前より大きくなった。また、経済発展の原動力である消費の分野では、常に担い手となるのは女性だ。女性市場が盛り上がりれば女性の職場は増え、就職戦線は女性にとって売り手市場となる。そして女性はさらに強く自由になり、女性市場はより一層繁栄した。これに比べ、男性の経済環境はことごとく不利であること、述べるまでもない。経済によっても「メス化」を余儀なくされているのだ。

優美で、見目麗しき(みめうるわしき)、良妻賢母(りょうさいけんぼ)、奥ゆかしい...、そんな清楚(せいそ)なタイプの女性は、悲しいかな、お見受けしなくなった。ゆえに、久しくお会いしたことがない。益してや、「八面玲瓏(はちめんれいろう)」「眉目秀麗(びもくしゅうれい)」なんて言葉は「死語」となった。昔は常に、女性は男性の尊敬の的だった。蔑視と見るのは、実は男の照れ隠しに過ぎなかった。「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」とは、女性への羨望の念の表れだった。その容姿のみならず、しぐさも、労りも優しさも、男性に勝る教養を兼ね備え、包容力溢れる「観音様」のような存在だったあの女性は、今、どこへ行ってしまったのだろうか? どうでもいいことだが、やっぱり蓮舫さん、好きになれない。